
DQNと喪少女がBLファンタジーにトリップした

一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DQNと喪少女がBLファンタジーにトリップした

【Nコード】

N1555X

【作者名】

一夜

【あらすじ】

DQNと喪少女はBLファンタジーにトリップしてしまった。不幸なことに豪華絢爛煌びやかな攻めたちがDQNを愛してしまった。部外者扱いの喪少女だが、嫉妬に狂ったふつくしい攻めたちから嫌がらせを受ける。主役は喪少女で、BL表現がありますがギャグの範囲内です。

プロローグ

「君には何に代えがたい程の価値がある。そう、王であるこの僕よりも」

空を手で切り熱弁する金髪碧眼の美男王は膝に少年を乗せている。その少年はあつと驚くようなキツネ顔だった。王は優美な指でその釣り上がった目尻をなぞり愛くるしさに笑みを零す。

「離せよこの変態野郎が！　つーか冗談でもそんなことを抜かす国民が哀れで仕方ねえわ！　いっそテメーよりはまともな神経持ちの弟に王位譲ってやれ！！」

少年DQNは髪の毛の振りかざし暴れる。その髪は脱色しプリン状態となっていた。

生粋の金髪を持つこの王は体を鍛えている隠れマッチョである。その為、DQNがいくら抵抗しようと身動きすら取れないのであった。

「君のために命を捨ててしまうことなど全く躊躇しないが、僕の前で平然と他の男の名を口ずさむ君を見るとそもいかないと思わされる。他の男になど思考の片隅にないくらいに僕で染め上げな」
「きめえし人の話聞けよおおお！！　ああああああ聖騎士iiiiiiii助けてくれええええええ！！！！！！」

傍で彼らのやり取りを忌々しく見ていた聖騎士。立場上為す術がなかった彼だが命令を賜りちゃっかりとDQNの腕を掴み口を開く。

「僭越ながら王、御神賜様が王を厭うております」

「ふん、男の嫉妬は見苦しいな」

「ありのままの事実を述べているまでです」

「そのとーりっそのとーりだ！」

照れることなかれ、とのたまい唇を寄せようとした王。DQNは恐慌状態寸前となり、奇声を上げ聖騎士へ手を伸ばす。

聖騎士は体内で歡喜の念が四方へとパアッと広がる感覚を味わった。味わいながらも、その念を押し殺し、血が止まる勢いで両手で覆い、王とDQNのその間へと入った。

その途端、DQNの体が宙へ浮いた。王と聖騎士が彼を呼びながら手を伸ばす。DQNは歡喜した。DQNにとってはこの足がつかない不安定な状態だろうがああ悪夢のような腕の中よりはずっとマシだった。

しかしその思いもつかの間、DQNの体はまた新たな男の腕の中へ飛んでいったのだった。

「兄さん、そんな強引じゃ嫌われちゃうよ？」

DQNを腕に優美な笑い声と共に現れたのは、これまた赤毛の美青年だった。魔法使い兼王の弟である。

彼はDQNの尻をついっと撫でた。

「うげえっ何すんだよこのっ！」

DQNは腕を振り上げようとする。だがDQNの体は石のように動かなくなってしまった。

「助けて上げたんだからこれぐらい、許してよ？　ね？」

王弟殿下は、上目遣いでDQNの顔を覗きながらも甘く美しい笑

い顔を見せたが、男であるDQNには逆効果だった。鳥肌を立てながら絶叫する。

「だれかまともな奴はいねえのかよおおお！！ 母さん助けてくれええええええ！！！！」

ふう、とため息が広い王の間を響かせた。

現れたのは、王と異母兄妹である世にも美しい姫だ。青み帯びた水色の髪は流星の如く輝きを放ち靡かせる。その彼女の小さな顔に埋めこまれた碧眼は大きく、鼻は控えめに尖り、唇は薔薇を乗せたように赤い。

「んもつつ弱いものいじめは辞めて！ どきゅんちゃん涙目になってるじゃない！」

姫の顔には正義感からくる怒気を滲ませている。その美しい顔に見とれながらも、DQNのプライドは粉々になった。

ひっそりと柱の影で一人の少女がそれらの様子を眺めていた。彼女の仮の名前は喪少女。

この小説の主人公でもある。

プロローグ（後書き）

次から喪少女視点になります

いじめられっ子喪子

「おいブス、俺らの代わりにこれやっつけよ」

「さぼつたら後でどんな目にあうかわかるよな？」

「掃除するしか価値がねえんだからしっかりやれよ」

目の前にははっと息を飲むほど美しい色素の薄い少年達。

まるでシンデレラの意地悪な義姉のようだと思っていると、床を拭いていた雑巾を顔面に投げ付けられました。

「ついでにお前の汚ねー顔も拭いとけ！」

「お前ひでー」

「ひやははは」

異界の雑巾も日本の雑巾も香りは同じなのです。しみじみと思っていると彼らは軽やかな笑い声を上げ行ってしまいました。

顔に追突し落ちてしまった雑巾を拾い、わたしは擦り始めます。

潔癖症の王は毎日拭くようにと指示なさっていますが、大半の床は汚れがありません。

何しろ広すぎるので、使われる面積が少な過ぎるのです。

皆は裸眼でわかる程度の汚れのみを拭くのですが、わたしは落ちて着かないので目に広がる全ての空間を拭きます。

あまり意味をなさないことは理解していますが、これは性分なのです。

水が無くなったので外に行こうとすると、彼の声が耳に入りました。

王座のある方向です。

ちらりと柱から覗き込むと、王様、聖騎士様、弟殿下様、妹姫様、そして我が同郷人のDQNさんがいらっしやりました。

ギリシア彫刻も全裸で逃げ出す眉目秀麗の皆さんが、一人場違いともいえるDQNさんを取り囲んでいます。

ちよつと・・・いえ、かなり絵画的に不自然さを感じざるを得ません。

わたしがいうのもなんですが、DQNさんは現代日本の基準でいうと不細工の部類に入ります。

釣り上った目尻、長く広がった低い鼻、どこかパーツのバランスが崩れた大きな顔。

浮世絵に描かれた人物そのものです。

しかし、この世界ではなんと絶世の儂げな美少年に該当するそうです。

王様や聖騎士様は美しいとされるこの世界で、その真逆の特徴の彼が美しさで彼らを上回るとは美の基準がよく理解できませんね。

本来ならうはうは幸せハーレムランドだったでしょう。もし彼の周囲が女性ばかりだったのなら。

女性にはほぼ縁のなかつたDQNさんです。向こうの世界では、好きだった女性がイケメンのツレに皆惚れてしまっていたそうです。そして女は皆イケメンがいいのかと憎しみめいたものも持っていたみたいで。

その鬱憤が女の最下層であるわたしに向かいました。

すれ違い様に舌打ちや悪口なんて当然の日々で、いきなり小突かれたり、直球で罵られたり、影で色々言われたりしました。仕打ちには慣れているわたしですが、辛いと言われたら辛かったかな、と

思います。

上記にある彼がわたしを苛めた原因というのはただの直感と思いつき込みに過ぎないのかもしれませんが、彼がわたしの容姿を罵る時の顔は、いつも優越と悲痛が入り混じっているように見えました。

言われているわたしが遣る瀬無い気持ちになるくらい、どこか悲愴な叫びに見えたのです。

そんなこんなでDQNさんとわたしはいじめっこといじめられっこという歪な関係が築かれたのでした。ちゃんちゃん。

少し話が脱線してしまいました。何でも王様は大の女性嫌いだそうで、この世界の城には妹姫様とのお付きの侍女を除いて女性が一人もいません。

この城を支えるのは多くの美少年たちです。何故美少年なのかというと、王の趣味でしょう。王がソツチ系のせいなのか、この城では平然と男性同士の恋愛が成立しています。

腐女子の皆さまが片手で鼻を押さえて悶絶するくらいの環境下なのでしょうが、残念なことにわたしはそっち方面への興味が一切ありません。

たまにあんな場面に出くわして、いやんつと心が揺さぶられることもなく、日常の一端として受け止めるだけで、わたしにとっては刺激も糞もありません。

そんなこんなで御神賜く神の賜りものゝである絶世の美少年は王様を初め、多くの男性に言い寄られることになったのです。

わたしも一応彼と同じ所から召喚された、ということとで御神賜らしいのですが、全くそのような扱いは受けずむしろ憎まれています。下働きの少年たちにまで使われているような現状です。

ふらふらとした足取りで水桶を運び、また腰を下ろし作業を続行させようとしていた時でした。いきなり長い足がわたしの視界に入りました。そして水桶を蹴ってしまったのです。

「あっ」

びちゃあ、と床は水浸しになってしまいました。足の持ち主を見上げると、そこには王様がいらっしやりました。相変わらず迫力のある美貌です。

「お前のような醜い者が我が城の足場を拭くとは・・・却って汚れてしまう。やめろ」

「はい」

DQNさんに向ける時とは180度異なる冷たい青の目。どこか背筋が寒くなります。

わたしはそのまま水桶を持ち、立ち去ろうとしました。

「待て」

「はい」

その声にわたしは振り向きました。

「こんな水たまりをお前は放置するのか？」

「えっ」

「今すぐ拭け。いいな？」

「かしこまりました」

よくわからないな、と思いつつまた腰を屈めて布に水を吸わせ片

付けました。

美しい妹姫様とDQNさん

きゅつきゅつと床を磨いていきますと、水面のように人を映し出すようになります。

これが嬉しくて楽しくて、押しつけられたとしても喜びを感じられるのです。

わたしと同じく御神賜様であるDQNさんの待遇とは天と地程の差がありますが、わたしはわたしなりの楽しみを見つけ、それにめり込んでいこうと思ったのでした。

フンフンと鼻歌しながら水桶に雑巾を絞ろうとすると、水桶に人影が出来ていることに気付きました。

見上げると、そこには何やら汚らしいものを見るような表情をした聖騎士様がいらっしゃりました。

「御神賜様をお見かけになりませんでしたか」

わたしは首を振りました。また彼が逃げたのでしょうか。

聖騎士様の眉間の皺は深まり、精悍なお顔立ちは苛立ちの色に支配されていきました。

「例え貴方がどんなに醜くとも御神賜様です。そのような下賤の者の真似はお止め下さい」

わたしは一度手を止め、聖騎士様を見上げました。『ゲセン』という単語を知らなかったからです。

じっと見つめていると、彼は口に手を抑え、「吐き気がする」と言って去って行きました。

わたしの容姿はそんなにも見苦しいものなのでしょうか。

さすがに、少し悲しい気分になります。

「お前また仕事押し付けられたのかよ？」

ふいに背後から掛けられた苦笑と嘲笑まじりのその声は、日本でも慣れ親しんだものでした。

DQNさんが来て下さったのです。

わたしがいつものように何も喋らないでいると、彼は飽きたように床に寝そべり始めました。

「あーあ、もう嫌になっちまう。もう一カ月だぞ。あの変態王に帰らせるといってもそのような術はないの一点張りだし」

あまり真剣味が感じられないように聞こえますが、真実DQNさんはうんざりしているのです。

「常に僕の傍におれ」が口癖の王様は寢床までDQNさんと共にし、やむなく王様が視察の為にDQNさんから離れても聖騎士様が常に護衛しているのです。

それに加え、魔法使い兼弟殿下様がいつのまにか背後にいてセクハラをしてくるそうです。

DQNさんには、1人になれる時間が全くと言っていい程ありません。

しかし、DQNさんはこうしてたまに1人でここに來ます。

それは、聖騎士様を出し抜いているからだそうです。

武勇伝を話すことが三度の飯よりも好きなDQNさんはわたしに教えてくれました。

聖騎士様をじっと見つめ、顔を少し近づけます。

聖騎士様がぼかんとした顔を見てとった瞬間、股間に鋭い一撃を与えるそうです。

護衛としてはあるまじき失態でしょうが、好きな人の前では無防備になってしまう聖騎士様が少し微笑ましく思えます。

「ところでさ、最近姫さまと会ってる？」

姫さま。王様の妹姫様のことです。

「はい。昨日お会いしました」

「あっそ」

妹姫様は、こんなわたしの所までわざわざ訪ねてきてくれてとても優しくして下さります。

この城での女性は晴れの時に雨が降るくらい珍しいからでしょう。

「やっぱりここにいたーっ」

鈴のように軽やかで凜とした声。

妹姫様です。妹姫様がこちらへ駆け寄って来ました。

彼女の透き通る水色の毛束がさらさらと乱れ輝きを放ちます。

大きな碧眼には彼女の生き生きとした感情が映し出されています。

DQNさんが待ってました、と言わんばかりに立ちあがり彼女の元へ歩きます。

「久しぶりですね、姫さま」

「あつ！ どきゅんちゃんもここにいたんだねえ！」

どきゅんちゃん、と言われDQNさんの顔が引きつりました。

ここへ呼び出された時、わたしは召喚陣の上で気絶していた彼に
対し思わず『DQNさん大丈夫ですか?!』と呼びかけてしまっ
たがために、そう定着してしまったのです。

『何だよドキュンって！俺の名前知らねえのか?!』と怒鳴られ
てしまいましたが、幸運なことに、彼はその単語の意味を知らない
ようです。

結局は『糞イラつくぜ。まああんな奴らに俺の名前を呼ばれたく
ないから許してやる』と許されましたが、妹姫様に偽りの名前で呼
ばれることは嫌なようです。

「あの、姫さま。俺の名ですがね、」

「お掃除やってないで私の部屋でお菓子食べましょうよお！」

妹姫様の壊れてしまいそうな程繊細な白い手がわたしの汚れた手
を掴みます。

DQNさんからの痛いほどの視線を感じながら、わたしは自然に出
た自分の愛想笑いを意識しました。

「頼まれたことなので終わらせないといけません。あと十分ほど
かかってし」

「じゃあわたしも手伝うわ！」

「いえっそんなことはさせられません。・・・一人でやりたいの
です」

お姫様に掃除の手伝いはさせられない、と断ったのですが、妹姫

様は嫌な顔一つせず花が咲くが如く笑いました。

「じゃあここで応援してるねっ」

そう言い、妹姫様は、一方的に今日の出来事をお喋りし始めました。

DQNさんはまた名前の訂正をできなかったにも関わらず、妹姫様のふつくしい笑顔を見て幸せそうです。

王様たちは勘違いしていらっしやりますが、DQNさんがたまにわたしの元へ来るのは、わたしではなくわたしを訪ねに来る妹姫様に会うためです。

DQNさんは、王の妹姫様に恋をしているのです。

王様達が過度な束縛をするのも、DQNさんがわたしに惚れている！と壮大な誤解をしている為もあるようです。自縛しているとは彼は思わず、何度もここへ訪ねてきますので、王様たちのわたしへの嫌がらせも増えてきます。

常識的に考えて警戒すべきは醜いわたしではなくむしろこの美しい妹姫様だと思うのですが、どうということなのでしょう。

「姫さま！ そんなところで何をしていらっしやりますか！」

血相を変えて妹姫様付きの侍女がやってきました。妹姫様は、床に座り込んでいます。

王族の女性としてあまりにはしたない所作です。

「だってえ。彼女に会いたかったんだもの」

妹姫様は半泣きでの外れなことを言いました。

わたしは侍女に睨まれ、なんとなく泣きたい気分になります。
男の敵意と女の敵意。前者は割と平気ですが、後者はなんだか苦手
です。

弟殿下様

女からの敵意。

男からの仕打ちにはへこたれないわたしですが、これにはとても弱いのです。

もし、わたしに女性としての意識があれば、男の敵意の方が苦手だったかも知れません。

ここで言う女性としての意識とは、『男』の目を意識する意味を指しています。

異性から評価される女としての性は、男からみた女としての好ましさと同義です。

わたしには、その女性としての意識が皆無に等しいのです。ですので、わたしはわたし自身を、男からみた『女』と捉えていないのです。

といっても、わたし自身が生物学的女であることには変わりありません。

日本人ならば、日本人ならではの特有性に深く同調してしまう。それと同様で、わたしは女の抱く思い、感情に深く同感してしまうのです。

どうせ、異性であり別種ともいえる男には、生物学上女であるわたしを理解できない。

そう思って、わたしは、わたしに敵意を向けてくる男による幾多もの感情に対して、自分自身にも平気なフリができます。そうやって、僅かながらの自尊心を守っているのです。

しかし、同種でもある女性には。

衣で隠した穴をいとも容易く剥がし、醜いところも虚勢を張っている所も全て見透かされている気がするのです。

そのことはわたしの尊厳を、自尊心を踏みにじり辱めるのです。

DQNさんは、わたしとは逆に、悲しい程に男性としての意識を持つているように思えます。

だからこそ、女に近づいては傷ついていたのです。

男としての尊厳を持っているからこそ、異性に認められない悔しさを持つのです。

DQNさんとわたしは異性に認められないという点では似ているようですが、それに対する受け取り方は全く異なります。

妹姫様は、わたしの掃除が終わらない内に侍女に連れられ、自室へ戻ってしまいました。

終わったら来てと言われましたが、あまり行く気にはなりません。逆にDQNさんは妹姫様の部屋へ訪ねたいようで、わたしの掃除を手伝ってくださりました。

「床拭き懐かしいな、中学以来」

高校では月1の割合で掃除当番となるはずですが、DQNさんは毎回サボっているのでしょうか。

DQNさんらしいです。

クスリ、と思わず笑ってしまいました。

「こつこつ拭いていると、思い出します」

そう言い、DQNさんに視線を向けました。すると、DQNさんの細い目は見開かれていました。

「すみません」

身分不相応にも、DQNさんにわたしは自分の話をしようとしてしまった。

DQNさんとわたしは対等ではないのに。

自分の軽はずみに後悔していると、DQNさんは何ともいえない表情をし、わたしに話を促しました。

どこか照れたように。

わたしは話しました。

わたしが密かにDQNさんに恋をしたきっかけの話を。

わたしは、DQNさんからの攻撃の標的とされ、いじめは男子を中心に広まりました。

女子は一握りを除いて大人しい子ばかりでしたから大抵の女子は自分が次なる標的にならないよう小さく丸まっていたましたが、一部の女子は男子に便乗しわたしを影でいじめるようになったのです。

あの時も、男子に押し付けられた床掃除をしていました。

放課後で外は雨の教室。

雨に濡れた土の匂いがわたしは好きでした。

『おいブス』

そのドスの効いた声にわたしは面を上げました。その途端、バケツに入った水を被せられました。

キャハハ、という大人数の笑い声。

わたしを見下ろしているのは、どこか神経質な臭いを漂わせる美人な女の子でした。

『反応したってことは自分がブスだって自覚してんだろーね！笑える』

取り巻きはそう言い、はやし立てるように爆笑しました。

小学生みたいだ、と思っていると美人女子に前髪を思いつきり掴まれました。

『お前さあ、その顔だよ。むかつくんだよ。存在自体が罪。ねえ、償ってよ？』

キャハハ、という声が響き渡ります。

前髪を掴まれたまま、廊下を渡り、ギョツとした顔をした女子と目が合い、そのまま男子トイレに連れ込まれました。

『汚物掃除中でーす。誰も入らないでくださーい』

取り巻きが廊下に向かってそう叫び、ドアを閉めました。

『どーするよ？便器の水飲ませるとか？』

『でもそれありきたりじゃあん？もつとすごいことしよっよー！』

『モツプを突っ込ませて公開処刑とか面白くない？』

見た目は天使の幼き女子たちは、いかにわたしを屈辱的に、酷い目に合わせられるかの相談をします。

わたしは、これから何が行われるのか不安でした。

こんなわたしにもプライドはあるのですから、絶対に泣きませんし無表情を保ち続けます。

でも、内心は怖くて、泣きたかったです。

許して、と外聞もなく乞いたかったです。

『男子呼んで来させよ!』

『それいいね!』

素晴らしい、取り巻きの一人がトイレから出て、男子数名を連れてきました。

一人は名も知らない男子と、もう二人は馴染みの深いDQNさんと、そのマブダチのイケメンさんです。

『ちよつとー、何やってんのこれ。』

イケメンさんが、水を被ったわたしを見つめ半笑いをします。

『何、ダメだつっの?』

美人女子がイケメンさんを睨み、イケメンさんは『そんなこと言っていないよ』と誤魔化すように笑いました。

優しくて知的といわれているイケメンさんでも、クラスの嫌われ者相手となるとこの反応です。

『で、俺ら呼んだのって何？』
『こいつヤツちやってよ！』

美人女子のその一声に、ぽかんとしました。
まさかそこまでの犯罪行為を平然と命令するとは。

『それが嫌なら口に・・・キヤツ！』
『ふざけんなよ』

DQNさんが美人女子の襟を掴みました。取り巻きがキヤーキヤ
ーと声を上げます。

『女の子に何やってんの?!最低!』
『死ね!』
『不細工の分際で調子にのんなよ!』

美人女子は、取り巻きたちと同様にDQNさんに暴言を吐きます
が、その声は震え、表情にはDQNさんへの怯えが出ています。
結局は、イケメンさんがDQNさんを宥め、泣き出した美人女子
を取り巻きが慰めるような形で場は収束しました。わたしは放置さ
れ、掃除の残りを片付け、帰ったのでした。

DQNさんが彼女達の言うことを聞かなかったのは、彼女たちが、
以前からDQNさんの悪口を言っていて、彼女たちの命令を聞くこ
とが気に入らなかつたのでしょう。
ただ、それでも。

話をし終わり、わたしはDQNさんにずっと言いたかったその時のお礼を言いました。

すると、DQNさんが乾いたような笑いをしました。

「お前ってバカ？」

「何故ですか？」

「そもそもお前がいじめられるようになったのも俺がお前をいじめようになつたからだろ」

「そうですね」

「意味わかんねえよ！」

確かに、わたし自身意味がわかりません。

いじめのきつかけとなつたDQNさんに恋心を抱き、彼女らに未だ何とも言えぬ怒りめいたものを持つのは、何だか自分が男好きのようで、羞恥心があります。

「ただ、それでも嬉しかったんです。わたしを庇ってくれたのは、DQNさんが初めてでしたから」

DQNさんの表情は、何か信じられないものを見るような顔に変異しました。

わたし自身、こんなセリフを言う自分が偽善的に感じられます。でも、紛れも無い真実なのです。

あの時が、どの時と比較しても一番嬉しく幸せでした。母と父が生きていて幸せだった記憶の中でも、ここまでの体の中からこみ上げてくるような幸福感はありませんでした。

「俺・・・お前にひでえ仕打ちいっぱいした」

「そんなこといいんですよもう」

弱者の前で人は平然と本性を見せます。

そう、皆本来はいい子たちなのです。

DQNさんも、あの美人女子や取り巻きたちも、イケメンさんも。

ただ、人間として知覚されないわたし相手だから、どこまでの残酷になれるのです。

戦争でも同じではないでしょうか。

敵国の人間がどんな目に遭おうともざまあみろと思える人々が多数派なのは、相手を本当の意味で人として見ていないから。

だから友人にはあれだけ親切で友情深いところを見せるDQNさんも、わたしには平気で醜いところを見せてくれたのです。

「わたしはDQNさんには何でもしてあげられます。本当ですよ？」

秘めていた本音をポロリとこぼしてしまいました。

引かれるかなと思いましたがDQNさんの耳にはどうやら入っていなかったようです。

DQNさんはわたしの髪をくしゃりと撫でてくれました。

DQNさんの顔に浮かんでいるのは、日本での嗜虐性溢れる笑いではありません。

懺悔と後悔、申し訳なさなど、とても優しい気持ちに占められたものでした。

「貴様！何をやっておる！」

その威厳のある声に、DQNさんとわたしは振り向きません。

王様と聖騎士様がいました。わたしの頭を撫でてくれたのはDQNさんでしたが、貴様というのは明らかにわたしのことを指していました。

「ドキユン！そんな女に触れるな！」

「御神賜様、お手が腐ります」

怒りに赤く染まった王様から飛び出たドキユンというその用語に少し笑いそうになりました。可愛らしい響きです。

「ギャーギャーうるせえなあ。俺の勝手だろ。つーかも帰ってきたの？もう帰ってこなくてよかったのに」

「僕は死ぬまで君を離さん！」

「ゲツ……」

王様の本気の声色に、さすがのDQNさんも恐怖を覚えたようです。

「僕と一緒に部屋へ戻るのだ！」

「俺は姫さまの部屋に行くんだー！！！！！」

そのまま、DQNさんは王様にお姫様抱っこをされ連行されたのでした。

わたしは一人ぼつんと雑巾を持ったまま、その姿を見送ります。

「君とドキユンくん、らーぶらぶだったね〜」

突如、目の前に魔法使い兼弟殿下様が姿を現しました。

本当に顔面前でしたので、驚き過ぎて心臓が飛び出るかと思いましたが。

「ずっと見ていらしたのですか」

「うん、王様の命令だしね。一応ボクは仕事には真面目なんだよ？」

にっこりと笑う弟殿下様。

弟殿下が神出鬼没だとDQNさんが言っていました。もしかや弟殿下様はずっと透明な状態でDQNさんの傍にいたのでしょうか。

そして、仕事というワードからして、こうしてわたしがDQNさんと会って話した会話も全て筒抜けで王様に報告していたのでしょうか。

王様のストーカーっぷりに、寒気がしました。

「ところでさー、君たち、どうしてニホンってところから召喚されたのか、何も知らないよね？」

わたしは、弟殿下様の顔を見ます。その顔に現れている感情は、笑顔で塗りつぶされ、うまく読み取れません。

「教えてくださるのですか？」

今までこの城の者たちは、教えて下さりませんでした。
絶世の美少年と讃えられるDQNさんの問いにさえも。

「うん。じゃないとコトが進まないもの。あのね、ドキくんは関係ないんだ。本来重要なのは女である君。
君は王の妻として連れてこられたんだよ」

信じられない言葉でした。この醜いわたしが、美しき王の妻とは。

「異界の者を妻とすることがこの国での風習なのですか」

「そうだね。それにも理由があるんだけど、それは秘密にしておう。それとさ、君は弱者じゃないよ？」

その言葉に、心臓を鷲掴みにされた気がしました。

「……心も、読めるのですか？」

「ふふ。君が王の妻や御贈神様ではなくて、王のお気に入りであるドキくんくんと繋がりがなくとも、ここでは圧倒的な強者だ。話はそれだけ」

弟殿下様は、前触れもなく消えました。

わたしは水桶と雑巾を持ち、弟殿下の残した言葉を考えながら、その場を後にしたのでした。

いじめっこ王様

弟殿下様から衝撃的な話を聞いて、二週間が経ちました。

わたしは王城の塔から景色を眺めていました。

王城の下には、絵に描いたような中世ヨーロッパ世界もどきの人々が無数に蠢く城下町が見えます。

ふと、「人がゴミのようだ！」が口癖だった数少ない友達を思い出しました。

何だか切ない気持ちになり、日本とは変わらない空を見上げます。

目の前に広がる世界。

誠に汚い空です。純白だったはずの雲は、子供の汚い指で弄つた如く黒灰色で濁ってます。

見ての通り、今日は良い天気ではありません。

少し残念な気持ちになりながら、空を仰ぎ見て新鮮な空気を吸います。

ああ、美味しいです。確かに生きているのだと実感できます。

城は自然を大事にしているようで、緑はありふれているのです。

自然への愛はどこの世界でも同じだというのでしょうか。

これだけ風景は異なるのに、異世界の空も緑も自然への愛着も日本と変わらないとは不思議です。

あの時、弟殿下様は認めてくださりました。

わたしたちは『異世界』に連れてこられたのだと。

今更過ぎるのですが、わたしたちはここがどこなのかさえ明確に教えてもらえなかったのです。

召喚され、混乱したDQNさんは王様に問い詰めましたが、「君と僕とは引きあう運命なのだよ」など愛の言葉ではぐらかされたま

まだだったのです。

初め、DQNさんとわたしは何かのドッキリ番組だと楽観的でした。

あまりに非現実的な出来事に、どこか愉快的な気持ちで眺め、流されるまま過ごしてきたと思います。

そろそろ、本格的にこの『現実』を直視するべきでしょう。

今までどこか夢の世界のように感じていたのも、ある種の自己防衛だったのです。

帰れないかもしれない、帰してくれないかもしれない、という想像がとてつもなく怖い。

あの世界に、故郷には戻れないなんて。

そう思っただけで、足の力が抜けそうなのです。

でも、逃げていては始まりません。

わたしは嘆息し、制服の胸ポケットから写真を取り出しました。

亡き両親の写真です。

彫刻のように整った顔を持つ母と、ヤクザのような父。

美女と野獣だな！ と散々言われたという二人は、結婚を反対する母の両親を押し切り、駆け落ちをしたそうです。

子供がどちらかに似れば天国か地獄と囁かれ、見事父親似の女の子が産まれました。

近所のおばさんからは陰口で嘲笑われ、子供にはからかわれ。

忘れられない記憶があります。あれは小学生の頃でした。わたしは容貌のことではしばしばいじめられ、夜な夜な羽毛布団の中で密かに泣いていました。ある時トイレに起きると、居間から母と父の会話が聞こえてきました。

覗いてみると、父は「俺が不細工なもんだからあいつは」と涙を流し、母に慰められていました。

正直、母に似たかったなあと思っていました。

母に似ていたのなら、見下されることもなかったのですから。

その時を境に、わたしはそんな自分にあつた気持ちを恥じ、父に瓜二つのこの顔を下に伏せず生きて行こうと思つたのでした。

「なんだそれは」

その声と同時に、写真が、両親がパツと視界から消えました。

振り向くと、金髪碧眼のふつくしい王様がいらっしやつたのです。

「これはお前の親の絵か？ ふん、醜さがよく似ている」

「返して下さい！」

わたしが写真を奪い返そうと王様の手に触れました。

王様の顔は不快感に歪みます。

「触るな、腐るだろう」

「じゃあ返して！」

必死なわたしの形相に、王様が少し引いているように見えます。

そうでしょう。今までは王様に何をされようと、うんともすんとも反応を見せなかつたのですから。

そんなわたしでも、譲れないものがあるのです。

もう二度と日本の地を踏めないかもしれないのに、この写真がもし失われてしまったら。

そう考えるだけで、ゾツとしました。

王様は腕を上げました。

王様は背が高いため、少し腕を上げられると低身長わたしには手が届かなくなっています。

ジャンプをし必死に王様の手にある写真を取り返そうとしますが、絶望的な差があり、かすりもしません。

「悔しいか？ ほれいほれい！」

王様は本当に愉しげです。

そんなにわたしは憎まれているのでしょうか。

「王様はわたしの夫なのでしょう？ 奥さんに向かってなんですかその態度は！」

「は？」

写真を返して欲しくて放った言葉。

王様の顔が目に見えて凍りつきました。

そんな表情をされては、わたしも戸惑います。

「え、と、妻にそのような態度をするのは良くないと思います！」

「お前など妻でもなんでもない！ 僕の妻と自称する醜女め、恥を知れ！」

王様は写真を二つに折りました。

その奇行に悲鳴を上げざるを得ませんでした。

「何するのですか、止めてください！ それはこの世界でたった一枚の」

「ふん、知ったことではない」

王様はそう無情に言い捨てます。

この時、わたしは父に申し訳なさを感じながらも、自分の容姿を呪いました。

もし、DQNさんのように美しいとされる不細工だったのなら、王様はこのような仕打ちをしなかったでしょう。

「お願いです、返して下さい！」

必死の懇願も虚しく、王様は写真を折り紙の飛行機のように折ると、外へ飛ばしてしまったのです。

「こんなものは飛んで行ってしまえ」

王様は笑って言いました。

ひどい、ひどすぎる。

わたしの目からは、涙がぼたぼたと流れていきました。

辛い時も、両親が見守っていてくれると思い、あの写真を片手に耐えてきたのです。

それを、この美しくも残酷なる王様は飛ばしてしまったのです。

わたしは、すぐに行動を取りました。

開けられた窓から飛ばされた写真は城下町の方へ飛んで行ったのです。

今すぐにでも取りに行けば、写真は、両親は大事に至らないのかもしれないかもれません。

全速力で走り、階段を駆け下ります。

途中、目を丸くしたDQNさんに鉢合わせました。

挨拶をする間もなく、写真を目指し、わたしは外へ飛び出しているのです。

門は幸いにも他に外へ出る人がいたようで、開いていました。

外出時は許可を取らなければならないのですが、そんなことに構っていません。

門番がいましたが、わたしのきつとおぞましい顔を見て驚いたのか、呆けたまま何も行動を取りませんでした。

この時、わたしは初めてこの世界の城の外へ足を踏み入れたのです。

いじめっ子王様（後書き）

7回ほどで終わると思います、と書きましたが7回では収まりそう
にないです。

DONさんの優しさ

呆けていた門番が追いかけてくる前に、わたしは人の中へ紛れようとうしました。

すると、時が止まったかのように人の口から出る騒音が、ぴたりと止まったのです。

わたしに気づいた城下町の人々は、動作を止め、吸い込まれたかのようにわたしを凝視しました。

その光景は異様の一言。どうやらわたしが原因のようです。

わたしは居心地の悪さと妙な申し訳なさに俯きました。

異世界人の見たこともない顔つきに彼らは驚いているのか、わたしの醜さに呆気に取られているのか。

おそらく後者でしょう。この反応は最初に城にいた時と同じです。現在は嫌がらせへと成り果てましたが、わたしがやることもなく城でうろつろしている、城の者がこういった反応を取ったのです。

『今』を『現実』と認知している現在、この城下町の人々の反応にほんの少し心が傷つきます。

しかし、傷ついて足を止めている暇はありません。

わたしは、王城の塔の窓の方角を確認しました。

写真は、王城の塔の窓から真っ直ぐ飛ばされたのです。

早く写真を取り戻して、城に　いえ、日本に帰りたいです。

幸運なことに、王都は東京のようにごちゃごちゃとはしておらず、車は勿論ですが、いかにもありそうな馬車はなく、石道はほぼ直線

に延びていました。

写真は、風が多少あっても石道の端に追いやられるのではないでしょうか。

そんな希望的観測を持ち、わたしは走りました。

疾走中、横からいきなり強い力で引き寄せられました。

「わっ」

瞠目しながらわたしの腕を握る人物を見ると、若い男性がいました。

横の路地から半分体を出し、わたしを見つめています。

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

彼は目を大きくし、謎の言葉を吐きながら何事か訴えています。

これは言語でしょうか。

そういえば、わたしやDQNさんはどうして城の人たちの言語が理解できたのでしょうか。

魔法？

もしそうならば、城から脱走をしても、誰かの手助けを借りられないように城内でのみ言語通訳が適応されるように仕組んだのでしょうか。

だから、今こうして投げつけられる言葉が理解できないのですか？

思考の嵐に飲まれる寸前、再度男にぐいっと腕を引っ張られまし

た。

男の大きく見開かれた目。

それにぞつとさせられ、わたしは辺りの人に助けを呼ぶかのように目を合わせようとしました。

周りにいたのは老人や若い女性などで、ただわたしを見つめるのみです。

今、この世界にきて初めて心の底からの恐怖を覚えました。異国ですら無いこの異世界で、頼る者が誰もいない。

誰にも知らされず、殺されるかも知れません。

わたしは、掴まれた右腕を回転させました。

大の男でも通常腕を回す方向とは逆に回転させられると思わず力を抜いてしまうそうです。

しかし、その男性は腕を離して下さりません。

更に腕をギリギリと見ているこちらが痛くなるほど力を込めると、男性は腕を抑えて座り込んでしまいました。

その様に罪悪感を覚えながらも、わたしは再び走りました。

彼は一体何を伝えようとしたのでしょうか、そしてどこへ連れていくこと。

それよりも写真です。

恐怖で放心した心を取り戻すかのように両親の写真がパッと脳裏に浮かびました。

突き刺さる視線を無視しながら走っていると、何やら子供達がいらいと集まっているのが目に止まりました。

写真はこの世界にはないようですし、もしかしたら写真を拾い上げて皆で観察しているのかもしれない。

小さい子供たちは、わたしの影で暗くなった視界に気づき、振り向きます。

あとは予想できた反応で、子供たちは固まりわたしを凝視しました。

「あつた」

わたしは、歓喜の念で震えました。

まさかと思いましたが、その子供たちの真ん中にいた少年がわたしの写真を持っていたのです。

「これ、わたしのなので返してもらっていいですか？」

言葉が通じないとわかりながらも声を掛け、有無も聞かず強引にその少年の手から写真を奪い去りました。

しばらく走ったまま、後ろを振り向いても追いかける様子はありません。

やっと足を止め、膝に手を当て足の腱を伸ばしました。

こんなに走ったのは久しぶりです。

片手で写真を眺めます。傷もなく汚れもなく、両親は無事でした。ただ、王様に付けられてしまった折り線だけが残念です。

その後は、二つに分けていた長い前髪で顔を隠し、歩いて行きま
した。

今日はもう疲れました。

しばらく歩いていくと、中年の男性が誰かの名を呼ぶような怒声
を上げました。

わたしは目を合わせないようにしよう、と判断しましたが、なん
とその中年の男性はわたしの方へ走ってきたのです。

よく見れば、その中年の男性は、棍棒のようなものを持っていま
す。

「えっ」

その狂ったような男性の登場に、付近にいた人々は男性が凝視す
るわたしへ自然と注視しました。

そして、狂った男性に共鳴させられたかのように、その場にいた
男性もわたしに飛びかかってきたのでした。

わたしは訳がわからず、再び走り出しました。

城下町の人々は、明らかな異端人物であるわたしを目にしても何
も手を出そうとはしなかったのです。

それが、あの男性の登場で排撃すべきだという芽出しとなったの
でしょうか。

顔面でそんな危険人物とされるなんて酷いです。

もしDQNさんなら、女神のように崇められたことでしょう。

ああ、なんとという顔面差別！

わたしは後ろを振り向きました。
足の遅いわたしはすぐに捕まりそうですが、何故か男性同士が争っていた為に救われました。

安心すると共に、わたしの心は恐怖から疑問へ占められました。
異端なわたしを殺すのが目的だとして、その仲間同士で争う訳はどういうことでしょうか。

もしや、急遽王様が懸賞金を出したのでしょうか。
顔面凶器女を殺せばうんぜんまんのな。

「いやだ」

俺があいつだったら自殺するとか散々言われてきたわたしですが、死にたくありません。

頭を振り、疲れた体に鞭を打ち更に足を早めようとした時、横の路地から腕を引っ張られました。

肉を通した衝撃が襲います。

わたしの体は誰かの上になりました。
その体の持ち主の顔を見ると、わたしに謎の言葉を投げつけたあの若い男性でした。

ああ、この付近の路地でした。あの若い男性がいたのは。

殺される恐怖のあまり、注意力を失っていました。

自分に後悔する暇もなく、男はわたしを押し倒し、またあの謎の言葉を投げつけます。

男には熱のような、強い感情が目にももっていました。

男は、わたしの腕を掴んだままスカートをたくし上げました。

「え？」

そのまま男はまくし立てながら、わたしの下着を剥ぎとったのです。

「は？」

男はわたしを見つめ、笑いました。

男は醜い部類の人間ではありません。しかし、わたしにはとてつもなく醜悪に見えました。

喉がヒュっとなりました。

これはもしかしくなくとも、もしかしてわたしを暴行しようとする。大きな声なんて出せません。

わたしを殺そうとしていたあの男たちがわたしを探しているはずですから。

だからといってこのまま、ということとは死んでも嫌です。

いえ、やっぱり死ぬのは嫌なのです。

ああ、混乱しています。

こんなことがあっていいはずがない。

けど、こんなことがあっていいはずがないことが今まで沢山起きてきたのです。

願いも希望も神には届かず、わたしは悲しいことに翻弄させられていきました。

では、これから起きるだろうことも？

「DONさん……」

自然と声が零れました。

女であることは、嫌なことなのですな。

男の指が、わたしの秘部へ伸びようとしていたその時でした。

「てめえ！」

怒号と共に、男の頬が殴られ吹っ飛びました。

その日本語が懐かしくて、信じられなくて。

神様でさえ願いを届けてくださらなかったのに。

「DONさん」

DONさんが大きい。DONさんの背は低いのに、この時とても大きく見えました。

「大丈夫か?!」

先ほど男を殴った時の憤怒の形相とは違い、わたしを案じるよう

な顔がこちらを真つ直ぐと向いています。

わたしがこくりと頷くと、心の底からほっとしたような顔になりました。

「早く帰ろつぜ。立てるか？」

DQNさんが、座り込んでいるわたしに手を差し伸べました。

わたしはその手をぎゅっと握り、立ち上がりました。

DQNさんと一緒に歩いた時の視線はそれはもう凄まじかったです。

しかしDQNさんは臆することもなく、わたしの手を掴んだまま、淡々と城へ目指したのです。

開いた門の前には、王様がいました。

怒気を隠さずその佇む様に、恐怖を覚えます。

「どげよ」

さすが怖いもの知らずのDQNさんです。

本気というモノなんでしょうか。

DQNさんはいつもとは異なる鋭い眼光で王様を見据えています。

王様はそれには応じず、無言でDQNさんとわたしの手を掴み、ぐいぐいと離させようと思いました。

「何すんだよ！」

「なぜお前は女如きに気を掛けるのだ！」

「男とか女とかそういうんじゃないやねえよ！ こいつは俺の仲間だ！」

DQNさんは王様を押しつけ、わたしの手を引っ張ったまま、門をくぐっていきました。

DQNさんと王様の怒気。

そこにはいつものどこか冗談めいた空気は皆無でした。

二人の間に何かあったのでしょうか。

原因はわたし？

いくらDQNさんが王様を嫌悪しようが、わたしたちが頼れるのは王様だけなのです。

帰る場所は、城しかありません。

申し訳なさが襲います。

そもそも、この世界でのDQNさんにとっての不幸の根源は全てわたしなのです。

あの時、床拭きをしていたわたしはDQNさんに手を踏まれました。

きっとその時に現れた溢れんばかりのあの光が、わたしたちを異世界へと誘ったのです。

わたしに物質的に接していたDQNさんも、わたしの一部として

認識されてしまったのではないでしょうか。

わたしはどうなってもいいから、DQNさんだけは、わたしは密かな決心を固めました。

「あれっ、君が僕のところを訪ねるなんて珍しいね」

弟殿下様の部屋を訪ねました。身を清めた後なのか、赤毛が濡れペチャンコになっています。

濡れたことにより更に赤毛が鮮やかになり、赤に映える彼の薄水色の瞳の美しさに一瞬見惚れました。

「今日はありがとうございました」

「何がかな」

弟殿下様は相変わらず読めない微笑でわたしを見下ろします。

どこか、試すような色の目は三日月の形を描きながらも笑っていないように見えるのは気のせいなのでしょうか。

「DQNさんをわたしの元へ送ってくださいったのは弟殿下様でしょうっ？」

DQNさんは只ならぬわたしの様子を見て、行かせないとする王様を振り払い、わたしを探していたそうです。

そして城下町を駆け巡っている途中、いきなりわたしが暴行されんとする場所へ飛ばされたそうです。

「まあ、止めないほうがいいかなって思ったよ」

「え？」

「君、ああいう熱血的な求婚に縁がなかったようだしね」

「・・・きゆう、こん？」

違います。

未遂でしたが、あれはただの暴力でした。

眼の前の人物の意志を無視し、己の欲望を遂げさせようとする身勝手な暴力。

わたしは、己の体の底から突き抜けるような熱く激しい怒りを感じました。

しかし、そのエネルギーを悲しみが波のように覆い込みます。

悲しくて、それに怒りや彼の言葉への異を唱える気にもなれなくて。

「誘拐婚って意味だよ」

荒れ狂う大波の感情に飲まれるわたしの様子を読み取ったのか、弟殿下様はフォローするように言いました。

「誘拐婚？」

「この国の風習だね。」

純潔を失った女は、その男の元へ嫁がなければならぬ。

例え純潔を失わなくとも、一晩他の男といれば純潔を失ったと判断され、その男と結婚するケースが普通なんだ。

純潔を失ったとみなされた娘は家の恥となってしまうからね。

だからこの国の男は好みの未婚女性がいれば、親戚ぐるみで拉致して強制的に一晩を過ごし自分の妻とさせることが珍しくないんだ

「よ」

そんな話、嘘だと思いたかったです
そんな残酷な話があつていいはずがない。

わたしは平成の日本人です。だから、異世界の文化に口出しをしてはいけないでしょう。

その世界には、その世界のルールがあるのです。

しかし、この世界の女性は構わないのですか？

辛くとも、周囲の圧力や暴力で、『嫌』と声を出せないのではないですか？

「犯罪にはならないのですか」

「一応は前王が他国からの非難を受けて誘拐婚を罰則化して取り締まっているけど、今の王はやる気がないからあつてないようなものなんだよ」

弟殿下様の言葉のショックで気づかなかつたのですが、あの若い男性の謎の言語は、このわたしを自分の妻にしようとしたということですか。

弟殿下様がそうはつきりとおっしゃっていたので間違いではないでしょう。

中年の男性の行動に触発され、あの時争い合っていた男たち。
彼らも、わたしを嫁にしようとしていた？

あの初期の城の人々や城下町の人々の異様な凝視といい、それはつまり。

た。
わたしの仮説が正しければ糸が繋がりますが、まさかと思いまし

弟殿下様のはかりごと

「そう、君は美しいんだよ。規格外にね」

わたしの心を読んだらしい弟殿下様が答えて下さりました。

わたしは美しい。

ただしこの世界限定ですが。

信じられません。

いえ、信じたくありません。

全く嬉しくないです。

あんな目に遭うくらいなら、醜いアヒルのままでいたいです。

しかし、わたしが美しいというならば、何故王様はあんなにわたしに意地悪をしてきたのでしょうか。

そして、聖騎士様や城の美少年たちも。

醜い者という言葉投げかけ、憎しみの目で睨みつけてきた王様。ブス、とからかい仕事を押し付けた美少年たち。

わたしが女という性別だから？ ホ だから？

DQNさんとの仲を疑われているから？

それでもどこかしっくりときません。

「どこかじっくりしないその感性を君は信じるべきだよ」

「もつわたしの心を読まないでください、不快です」

そう言うと、弟殿下は声を上げて笑いました。

「君、色々とはっきりと言うようになったね。以前は不快なことをされてもその意志を口に出さなかったのに」

はつとさせられました。わたしが美しいと自覚したからどこか傲慢になってしまったのでしょうか。

その考えをまたもや弟殿下は読取ったのか、否定するように首を振りました。

「王様は君にとって大切なものを取り上げた。君はその行動に対して異を唱えざるを得なかった。

あのやり取りで君は自分の気持ちの伝え方を理解したんだよ。

例え、自分の美しさに自覚しても君は変わらないに相違ない」

「・・・そう言われると、そうなのかなと納得してしまいます」

この魔法使いは、どこまで見通すのでしょうか。

考えていることだけでなく、わたしの心の深層のことも読み取れるのでしょうか。

「違うよー。僕がなんとなく思った、ただのす・い・そ・く」

・・・頭が発狂しそうです。

弟殿下と一緒にいたくないです。

見透かされることが、嫌で仕方ないのです。

きっとわたしはとんでもなくプライドが高いのです。

自分の弱みを他人に知られることがとてつもなく不快なのですか
ら。

ふと、疑問がわきました。

「王の母親も、わたしと同じ異世界人なのですか？」

わたしと同じ世界かもしれない人。

もしご存命なら、会ってお話したいと思いました。

ひよっとしたら、王様たちの力を借りなくとも帰れる手がかりが見つかるとも知れないですから。

「王の母親は違うよ？ だって召喚する必要がなかったもの。

風習といっても気まぐれなものさ。その必要に迫られた時だけ」

「必要とは、どういう」

そう聞き直そうとした途端、腕を引っ張られました。

この時、わたしはあの若い男性に腕を捕まれた場面が、まるで再現されたかのようにあの時の感覚に陥ったのです。抵抗するという

手も思い浮かばず、そのままされるがままでした。

はっと気づいたときには、弟殿下様は部屋へわたしを完全に引き入れていました。

カチャリ、という音が部屋を反響して、背筋が冷たくなります。

「何の、真似ですか」

弟殿下様は笑っています。

わたしは彼の真意がいつだってわからなくてどこか恐怖感を持っています。

「ねえ、君は王様が憎い？」

臆すわたしを弟殿下様はどこか面白そうに眺め、そうわたしに問いました。

弟殿下様の薄氷を思わせる瞳は相変わらず笑みを浮かべています。

「いいえ」

わたしが否定すると、弟殿下様は意外そうな顔をしました。

「どうして？ 君はこの世界へ拉致されてきたんだよ？ 誘拐婚と同じか」

「王様はわたしをあのように手籠めにしようとはしていません」

「ドキユンくんにはどうかな？ 手籠めとまではいかないけど、色々触られてドキユンくんかなり嫌がってるよね？」

「それは」

男性だからと軽く見ていましたが、DQNさんはかなり嫌な思いをしていたのでしょうか。

そうですね、例えどんな相手だろうが、自分の意志を無視されて体を好き勝手触れられて苦々しく思わないはずがないのです。

あんなの、人として扱ってもらえないことと等しいです。

「ドキユンくんはこう思っているはず。早く帰りたい、ってね」

「・・・何をしたいのですか。ただでは、帰してくださいさらないのでしょうか？」

「君は聡いね。僕の言いたいことをすぐに察してくれる」

「わたしはドキユンさんを日本へ帰してあげたいです」

わたしがどうなっても。

その誓いを読んだ弟殿下様は満足そうに笑いました、

「じゃあ直入に言うね。王を殺してくれないか」

それは、予想だにできなかった言葉でした。

「こ・・・・・・」

「何だいそれは」

どうやら聞き間違いではなかったようです。

「なぜ」

なぜ殺して欲しいのですか。

なぜわたしにそれを頼むのですか。

「僕は常に制約に縛られているんだよ。一般魔法及び上級魔法はもちろん、姿を消せる、心も読める、瞬時に移動できる・・・など魔法を超えた異能を持つんだ。制約は強すぎる力への抑制となり、制約を破れば応報がつく。」

僕はこの城から出れないし、自らの能力で物事を変えられない。他者の人生さえも変えてしまうようなことは、他者への命令など間接的なことでもやってはいけない。

でも、異世界人である君とドキュンくん相手ならそうでもないみたいだ。

例えば、ドキュンくんを君の元まで瞬間移動させられることができた。結果、王の妻となる君の純潔を守れた。これはとてつもなく大きな意味を持つんだよ。

その要因は何か、今のところ仮説は三つ立てられる。一つは、この世界の人々に植えつけられていると推定される『軸』が異世界人には有らず、制約と認知される装置が備わっていない。

二つ目は世界調整説から。この説によると、『軸』は世界が万物に賜るものであるとされる。この世界に来たばかりで君らは世界の住人だと認知されず『軸』が形成されずに現在時点では白紙状態でいつかは『軸』が造られてしまう。

三つ目はただ異世界人ってだけで融通が多少効くだけっという曖昧なもの」

弟殿下様は、わたしの心の中の間に後者のみ答えて下さりました。そして、頭があっばなわたしはよくおっしゃっている意味がわからないのです。

「つまり、異世界人である君やドキュンくんを通してなら僕に応報

が付かずに王を殺せるというのが僕の仮説」

「動機としては、やはり弟殿下様は王になりたいからですか？」

あれ、でも王座についたとしても人に命令できないなら王様になる意味がないですし、怨みですか？」

「僕は王の椅子に座れるだけでいいんだよ」

彼はそうにつきりと答えました。

これは、権力欲というもののなのでしょう。

それは、自分の命を危険に晒したり、肉親を殺してまでも満たしたい欲なのですか？

「君には理解できないだろうね」

どこか自嘲気味に笑う弟殿下様。

はい、全く理解できません。

「これは賭け。君が王を殺めて僕に何もなければ僕が君たちを元の世界に戻してあげる。

そして僕が王座につく。

もし僕が応報を受けたとしても、その直前に君たちを日本へ帰すよう弟子に遠隔感応して伝えるから安心しなよ。

命をかけた大博打、面白そうじゃない？」

「面白い？」

何を言っているんでしょう、この人は。

悪寒で身震いがしました。

弟殿下様の部屋から出ると、そこには王様が立っておられました。傍には、聖騎士様が不快を隠さずにふつくしい顔をお歪めになつておいでです。

よく見たら、王様の影になっているのは妹姫様。俯いた顔からは雫がキラキラと硝子のように落ちていきます。なぜ皆様がここに。

「なんとふしだらな娘なのだ！ ドキユンだけでなくっ……！」
王様の、憎しみに煮えたぎった目。
ぐつぐつという音まで聞こえてきそうな勢いです。

「……うっ……ひっく……本当に……？」

何が？ と聞いてはならないでしょうか。
妹姫様の瞳はサファイアようで、涙により透き通り輝きを更に放ちます。

その様がふつくしすぎて、意味もわからないままごめんねと謝りたくなります。

「うわあああああああ！！！！」
「姫さま、私は裏切りませんから」

侍女は妹姫様を胸に抱き、よしよしと背中を摩りとても満悦そうです。

こづいづのは、何でしたっけ。

百合？

弟殿下様の部屋に入ったわたし。

それは、不貞を疑われるだけの材料になったのでしょつか。

一晩を共にすれば妻にならなければいけないという困らしいです
から。

弟殿下様………わざとですね？

嫌がらせですね？

弟殿下様のはかりこと（後書き）

部屋を出て王様達がいたのは、妹姫の侍女が偶然喪少女が部屋へ入るところを目撃し皆に報告をした為です。

喪子狩り

いつもの場所で、ゴミを集めちりとりで取っていた時でした。

「あのことはなさらずにいてください」

開口一番にそう言ったのは、灰色の髪、黄土色の目と薄い配色のぼんやりとした美少年でした。どこかでわたしは彼を見ましたが、思い出せません。この子はとてもお綺麗なのですが地味で目立たない、記憶に残してもらえないタイプなのでしょう。

「君は」

「ご存じなかったでしょうが、私は王弟殿下の弟子であるのです。是非、お願いを申し上げたく………あああああ苛々する！！俺は女が大嫌いなんだ！！！」

「そうですか」

「特に美しい女はな！」

大人しそうな美少年ですが、口を開けるととても攻撃的なようです。人は見かけで中身は掴めないのだとしみじみ納得できます。

「そんな俺が頭を下げて敬語を使って頼みごとをしてんだ、言うこと聞けよな」

「ところであのことは、何のことをおっしゃってるのですか」

「そこからか。とことん察しの悪い愚鈍な女だな。女全般がこうなのかお前が特にこうなのかは知らんが、とにかく女は死ぬ。総じて脳に蛆が湧いて死んでしまえ。特にお前、御神賜様であるから俺に殺されずに済むことを神に感謝しろ。」

ああもつ、なんでこんな醜い女と面を合わせなければならんのだ。さっさと本題に入る。馬鹿は馬鹿なりに理解しようと努めて聞け、低能女。お前が決してしていけないのは、殿下の御命を賭けての大博打に乗ることだ」

「何故そのことをご存知なのですか？」

あの時、弟殿下様はお弟子さんに応報を受ける直前にわたしたちを帰還させるようお伝えするとおっしゃっていました。彼が応報を受ける直前にと言ったのは、他者の人生さえも変えてしまう行動は、他者への命令など間接的なことでも禁じられているからです。その他者がわたしたち異世界人であり、現時点では応報がつかないと考えられても、この世界の住人であるお弟子さんに直接命令することは憚れたのでしよう。

「遠隔感応で部屋の中の会話を聞いていたんだよ。万が一だが、殿下が魔女に誑し込まれるかもしれない危険性があつたからな」

「魔女つて……わたしのことですか？」

「どうでもいいことばかり突っ込むな！ 本題に入らせるよ！」

「その件ですが、ご安心してください。わたしは人の命を奪つてまで事を成し遂げたいなんて考えてません」

DQNさんが望むことは何でもしてあげたいのですが。

「人を殺してまでなんて、思わない」

そんな考えは元からありません。

弟殿下様に渡され、こつそり足の付根に装備した短剣。これで一刺しすれば、全ての血肉ある生き物は蛋白質と水とに分解され、死に至らしめることができるそうです。ああ、なんて恐ろしい武器な

んでしよう。戦時を生き抜いた訳でもない平和ボケした平成のゆとりっ子のわたしにはそんな度胸、端から無いのです。

その覚悟と真正面から向きあうことになるのは、後のお話ですが。

弟殿下様のお弟子さんはわたしを疑いながらも一応は納得してくれて、嫌味と罵倒を言い残し去っていきました。

「大丈夫？」

先ほどの地味綺麗系の美少年ではなく、華やか可愛い系の美少年がわたしに声を掛けました。その覚えのある彼を認識し、想起されました。殿下の弟子だと名乗ったあの男の子は、この目の前の美少年と一緒にわたしに雑巾を投げつけたりバケツを蹴りあげたりゴミを撒き散らかした下働きの子らでした。

そんな彼らの仲間のこの美少年は、何故かわたしを案じるかのような目の光を見せています。

「あいつに何もされてない？」

「特には」

「そう。あなたにさ、一応謝罪しておきたいんだけど。僕、本当は僕らの代わりに掃除してくれてるあなたにあんな嫌がらせしたくない。けど、あいつらがあなたを気に入らないっていうから一緒になつて色々酷いことした。悪かった。別に許さなくてもいい」

この美少年は、わたしに謝罪をしています。目を瞑り、わたしか

らの言葉を待っています。

「許します」

「え」

そんなにわたしの言葉に怯える様を見せられていると、こちらが申し訳なくあります。

「もう気にしないで下さい」

「……ありがとう。それと本当はこれを伝えに来ただけ、あんた今すぐ逃げた方がいい」

美少年は緊張を走らせ言いました。

「さつき、城の者が皆呼び出されて、王の御命令が下された。『王妃として召喚された御神賜様は男を誑かす異世界の淫魔。見つけ次第、処刑すべし』とさ。」

あいつと接触していてたのを見た時はあんた殺されるのかと思っただ。特にあんたを憎んでたあいつがその招集でいなくて命令を聞いていなかったのは不幸中の幸いだな。

あいつ、殿下の弟子だし様々な魔法を使えてとにかくキケンなんだ」

「わたしは、逃げたほうがよろしいという訳ですか？」

何やら大変な事態になっている。現実感が沸かないながらも、不安と恐怖がぞくぞくと上がってきました。

「門は見張られているし、闇雲に逃げるよりも身を隠した方がいい。もし見つかったら、あんたは処刑前の罰と称して死んだほうがましと思わされるような仕打ちを受けるかもしれない。僕、そんなあ

んた見たくない」

「どこに身を隠せば」

「僕がいい場所知ってる」

そういい、美少年はわたしの手を引き導いてくれました。わたしは不安に襲われ、隠れ場に行く前に見つかってしまったのかと聞きました。美少年曰く、彼が招集での王様の長い話が終わらない内に抜け出したために、まだわたしの搜索は始まってはいないだろうということだそうです。

ゴホッ、ゴホゴホッ、と激しい咳が続く。DQNは息苦しさで胸の締め付けられるような痛みで喘いでいた。

「御神賜様・・・やはり医者を」

傍で控えるのは、聖騎士。王は仕事で今はいない。王が帰ってきたら余計に悪化しそうだ、とDQNは苦々しく思う。あれから険悪なムードだ。訳の分からぬことを言って一人でキレ癩癩を起こすあの王とはもう付き合いきれない。

「ただの風邪引いただけ。医者なんていらね」

「ですが」

「いらねえつつつてんだろ！」

DQNが怒鳴る。聖騎士は、青ざめ、下を向く。その様子を見て、DQNは小さく謝罪した。

「お前が俺を心配してくれているのはわかってる。本当にお前はいい奴だよな。なんであんな変態王のところで働いてんの」

「私は、本音が口からだだ漏れになってしまふのです。それも、マインスなことばかり。その悪癖をご存知である故に、王は私を傍らに置かれたのだと思います。私は負の感情を隠せないで、ある意味信用できるのでしよう」

「ふうん。いつそプラスがだだ漏れだったらよかったのにな」

「本当に、そう思います。負とは逆の感情を伝えることは、酷く不得意なのです。それすらも王は見越しているのではないかと私は」

聖騎士は甘く切ない目でDQNを見つめる。

「それなら態度で表せばいいんじゃないかねえの？」

「態度、度？」

もしかそれは自分を誘っているのか、と聖騎士はわなわなと震える。都合のいい妄想だとは百も承知だが、この凶々しい夢も捨て切れない。

現在彼はあの魔女の意中に嵌っているのだ。その魔女を断ち切り、彼を正常にすればもしかしたら、と聖騎士は儚い期待を持っている。

「昨日、王様がやっつとご決断なされたのですが」

「あのうんこ王がなんだ？」

王様、という言葉が耳に入り途端にDQNの顔が虫を噛んだような顔になる。

「男を誑かすあの魔女を滅します」

「は？」

「あんな女、王妃にふさわしくありません。ましてや、あなた様にも」

「なんの話だ？ 王妃って、おい、ん？ 魔女って誰のことだよ？」

「お前に付属してやって来たあの醜女のことだ」

ドアが開く。DQNに与えられた部屋には内側からかけられる鍵がついていたが、城の主である王には関係がなかった。

「お前はもうよい。あとは僕がドキュンを守っている」

「しかし、王」

「黙れ。お前は皆と共に、あの女を探し出し、処刑しろ」

「………畏まりました」

聖騎士は一礼をし、部屋から出ていった。

「処刑って何だよ？！ おい、あいつに何かしたのか？！」

「ドキュン、もう心配しなくていい。あの魔女を処すれば、お前も目を覚ますだろう」

「意味わかんねえよ！ あいつが何をしたってんだ！！」

その言葉に返すこともなく、王はDQNを抱きしめた。骨がみしみしと鳴り、肺が圧迫され、DQNの顔が真っ赤になる。照れている訳では断じて無いのだが、案の定王は勘違いをし、DQNを可愛らしく思った。

「がががが……く、苦し……は、はなせ。俺はあいつを助けに」

「ドキyunはここで僕と一緒にいるんだ。全てが終わるまで」

DQNは気を失った。王は、DQNの頬を撫で、唇とそれを重ねた。

「こつちだよ」

嫌な予感はしていたのです。美少年はわたしと目を合わそうとはしてませんでした。それは、何か後ろめたさを持っていたのだろうと推測していましたが、美少年の謝罪と誠実さを、わたしは信じたかったのです。

こんなことがあっていいはずがないことが今まで沢山起きた。

それでも、期待せずにはいられなかった。

連れてこられた階段の横にある隠し扉。そこには、あの意地悪をしてきた下働きの美少年たちがやにやとわたしを待ち構えていたのです。

美少年のしつと

ぐったりと体を王に預ける狐顔の少年を、若き王は愛しげに頼ずりした。

もうじきだ。存在だけで王の古傷を抉り、少年の心を惑わした忌まわしき女は報いを受け、少年は王のものとなる。

人の恋路を邪魔する邪な者はケツから口へ杭で打たれて死んでしまえ。そう名言を遺した詩人の名は何だっただろうか。

あの女さえ消えれば、王と少年の愛を妨げる者はいなくなるのだ。聖騎士はDQNに懸想しているようだが、とても忠実で理性のある男であるから心配はないだろう。

そして、魔法使いでもあり異母弟であるあの男。DQNに興味のあるような素振りを見せ、何度かDQNの体を無遠慮に触れていたが、所詮哀れの身である。王は寛容な心で許してやろうと思った。例え身の程知らずの思いを抱いていたとしても、奴は他者はおろか自分の運命さえも変えられない。

王は、DQNとの出会いを思い起こす。召喚陣の上で、無防備にその肢体を投げ出していた少年。その打算のない無垢な姿に、一目で囚われた。これは偶然的な巡り合わせではなく、必然そのものだと王は考える。

早くその瞳を見せておくれ、と王は語りかけるように召喚陣の方へ駆け寄ろうとした。

しかし。あの女がいち早く少年を抱き抱えその頬をぺちぺちと叩いた。運命の出会いの瞬間を邪魔された王の憤怒は、今でも夢に見るほどに刻みつけられた。

「王妃となるのはお前だったのだ」

事が済んだらドキュンを王妃にしよう。こんなにも美しいお前なら性別など関係なくあの愚民どもに祝福されるだろう、と王は高笑いを上げた。

隠し部屋へ引き入れられ、扉は閉ざされました。

蝋燭の僅かな光の中で、二人の美少年たちの白い顔が照らされています。この大柄の美少年と、眼鏡を掛けた知的そうな美少年は、わたしに仕事を押し付け嫌がらせをしてきた者たちでした。

「破滅的なバカの癖にやるじゃねえか」

「本当に連れて来られるとは思ってなかった。よっぼどこの淫魔がバカだったってこと？」

否定はできません。事実、わたしの成績は下から数えた方が早いのです。

わたしをここへ連れて来た華やか美少年の手に力が入りました。

「ごめんね」

彼のぽつりと放たれた声が鼓膜に音響します。わたしが何か言おうとして口を開くと、「でも、騙されないで逃げてほしかったよ」

と、彼は半ば怒りを込めて言いました。

他の美少年達は笑い声を上げます。わたしも、笑いたいような泣きたいような気分になりました。

「お前、その女に恋焦がれているんだろ？」

大柄の美少年が華やか美少年を引つ張り上げました。

「違う。僕は」

「いつそその淫魔と一緒に愛の逃避行をしてくれれば面白かったのに」

「・・・っ・・・そんなことできないって、わかってるでしょ？」

「まあな。俺らに何されるか、怖いんだろ？」

「・・・それだけじゃあ、ないよ・・・」

頬を染め、大柄美少年から目を逸らす華やか美少年。

「この淫魔は王弟殿下の部屋に入ったらしいな。王弟殿下を惑わそうとするとはなんとふしだらな！」

割り込むようにその声を張り上げた眼鏡の美少年です。おそらくこの眼鏡の美少年は流れを変えたかったのでしょう。わたしにとっても耐え難い雰囲気を感じられたので、彼がわたしを侮辱しているとわかっていてもその発言に救われた気がします。

そもそも、淫魔という言葉自体がちょっと。わたしには縁が遠すぎる用語であるために褒め言葉に思えてしまいます。セクシーと同義的な感じで。

「そうだな、この淫魔をやっつけなきゃな！」

「えっ……」

「何だ、文句あるのか」

「……」

「なんかお前があの子を庇ってんの見たらムカついてきた。存分に痛めつけて息の根を止めてやるぜ」

「僕は別に彼女を好きとかじゃなくて、ただ、お掃除を代わりにやってくれてたから……」

「そう擁護してんのが好きってことじゃねーの？ なあ？」

これはshit！ というものですか。きっとBL界のお約束なのですね。

ああ、わたし本当にそういうの興味ないんですけど。

よし、彼らがこの痴話喧嘩に気を取られている隙にこっそり逃げ……

ドアを開けると光が入ってしまい、彼らの注意を引いてしまいました。

はい、予想していました。

引き戻される前に、わたしは部屋の外に向い叫びました。

助けてください、と。

それが沢山の人々を呼び、より酷い事態になってしまうことも容易に想像できました。

けど、DQNさんか弟殿下様が助けてくれるのではないかと――
――期待を抱いてしまったのです。

その結果、わたしのSOSは思わぬ人物に届きました。

「やめてあげてー!」

妹姫様です。彼女は、ここに押し寄せようとする城の使用人たちを物凄い勢いで押しつけ、呆気に取られる美少年たちを尻目に、わたしを庇い立てするように前に立ちふさがったのです。

「うるせえブス、あっち行ってる!」

「おい、姫様にそんな口を叩くな。姫様、王の命令です。この淫魔を退治しなければ」

「いや!」

妹姫様は、涙を流しわたしを庇おうとしてくれています。ああ、DQNさんの想い人だと思って少し距離を取っていてごめんなさい。

「姫様!」

蒼白な顔で駆け寄ってくるのは、妹姫様の侍女です。

「そんな女……庇わないで下さい! お優しい姫様なので、心をお痛めになるのはご理解できますが、その女は人の心を弄ぶ淫魔ですよ!」

「例え淫魔だとしても……全く女の子のいないこのお城に彼女が来てくれて、本当に嬉しかったの……!」

そもそも淫魔じゃないのですが……。

「何をあなた達はふざけておいでなのですか」

見物していた使用人たちを剣で脅すように散らさせたのは、聖騎士様。

そして、彼がまっすぐに見据えているのはわたし。

「下卑たことを企んでいたのではないでしょうね？ そんなことをしても取り込まれるだけだというのに。さっさと殺します」

聖騎士様は、わたしへ剣を振り上げました。

短い人生でしたが、色々なことが走馬灯のようによぎり・・・ませんでした。

ただ、DQNさんのことが、思い浮かび、彼の行く末が気にかかりました。

DQNさんの血

「はっ」

DQNは目を覚ました。顔面には、王の愛に満ちた眼差しがあった。どんとんと近づいていくそれに、DQNは悲鳴を上げ王の腕から逃れた。

「照れることなかれ」

「そついう問題じゃねえよっ」

DQNは王から距離を取り、突進をした。

「ドキュン、お前から胸へ飛び込んでくれるとは」

DQNの細く小さな体が胸に飛び込んできた喜びに感涙しかける王だが、そのまま壁へ押し付けられ、首元を強く圧力を掛けられた。王の力が抜けた瞬間に、DQNは王の腰元にある剣を奪い、ドアへ走ろうとする。しかし、足を王に引っ張られてしまった。

「いい加減、恥ずかしがらずに素直に……ぐっ」

冷たい感触が王の首元を走る。DQNは剣を王の首元に当てていた。

「ドキュン、君が王からの寵愛を受けているからといってこの無礼はいくら何でも許されん」

「この刃で首を貫かれなくなったら、大人しくこの部屋の鍵を渡しな」

刃が王の首をわずかだがちくりと刺し、王は恐怖心に押されるままDQNに鍵を渡した。DQNが部屋を出ていき鍵を閉めていく音を、王は放心状態で聞いていた。

「聖騎士、やめろ！！！！！」

その声は、幻聴だと思いました。まさか、また助けに来てくれるなんて。

聖騎士様は手を止め、突如現れたDQNさんの姿を目を見開いて驚きました。

「なぜあなたがここに」

「そんなことどうでもいいじゃねえか」

またDQNさんを弟殿下様が飛ばして下さったのでしょうか？

「こいつを殺すっていうなら、その前に俺が相手になる」

DQNさんのその言葉に、クラリとしました。助けを呼んでおいでですが、何故そのようなことを言い出すのでしょうか。

「DQNさん、何を言っているのですか！」

「本気でおっしゃっていますか？」

聖騎士様が、今までDQNさんには向けたことのなかった冷たい目で、DQNさんを見据えます。

「お前は立場上俺を殺せない。俺もお前を殺したくない。だから、どちらかが降参または戦闘不能となった時点で負けとしよう。お前が負けたらこいつの処刑はなしな。俺が負けたらもう何も言えねえ」「よろしいですが、私に勝てるとお思いなのですか？」

「戦っている間はいいつに誰からも触れさせるな。俺は……ゴホッゴホゴホッ！！！」

急にDQNさんが咳き込み、身を屈めました。咳を抑えるように口に当てていた手からは、薄暗い部屋でもわかるほどに禍々しい赤が溢れていました。

「DQNさんっ……それは……？」

風邪、というレベルではないでしょう。吐血したのです。吐血といえば、生命に関わる病だと言われていますが。

「大丈夫だ」

DQNさんは駆け寄るわたしを血のついた手で制し、軽く笑いました。

なぜ、なぜ。

その思いが、頭を巡り、DQNさんの体が心配で、胸が潰れそうです。

「御神賜様……私は手加減をしません」

先ほどのDQNさんの吐血で顔を強張らせていた聖騎士様ですが、また冷徹な表情に戻り、剣をDQNさんに向けました。それに応えるように、DQNさんが聖騎士様に剣を振るいます。それが始りの合図でした。

わたしたちは部屋から出て、開かれたドアからその戦いをじっと見守っていました。

金属のぶつかり合う音が、この狭く薄暗い部屋に反響します。間違はなく聖騎士様は手加減をしてくださっているでしょう。でなければ、勝負は一瞬で終わるはずでしょうから。DQNさんをわずかも傷つけることを、王様も聖騎士様も望んでいないのです。だからこそ、DQNさんの剣を弾き戦闘不能にしようとしている。

DQNさんは踏ん張ります。彼は野球部のエースだったのです。朝も夜もみっちりと体を鍛え、運動してきたのです。ただじゃ負けません。

汗をにじませ拳を握っていると、後ろから引っ張られました。わたしは現在自分が処刑命令を出されていることをすっかり失念していたのです。

使用人であろう美少年が、わたしの首をぎりぎり締めました。

「やめてっ!!」

妹様が悲鳴を上げ、美少年を突き飛ばして下さいました。

「どうしたっ!!」

DQNさんが振り返った瞬間、DQNさんの剣がカキーンと飛ばされました。

「もう観念してください」

「おいっ、卑怯だぞ今のは！」

「戦いに卑怯という概念はありません」

聖騎士様が、再び剣をわたしに向けました。DQNさんに庇われ、あんなに一生懸命になってもらえて幸せだった。そう思った瞬間、聖騎士様の顔に何かが飛び散りました。

その飛ばされた何かは、聖騎士様の目に入ったようで、聖騎士様は隙を見せました。DQNさんは飛ばされた剣を取りに行き、聖騎士様の首元に当てました。

「戦いに卑怯も糞もないんだよな？」

「くっ……」

聖騎士様は剣を手放しました。

「DQNさんっ、怪我はありませんか、先ほどの吐血は……？」

「吐血じゃねえ。事前に軽く切って仕込んでいたフェイクだよ。病弱に見せかければ油断するだろ？」

そう言い、見せてくれた二の腕からは血がだらだらと流れていました。

「早く手当しないと……！」

「私が治します」

そう言いDQNさんの腕の傷を治してくれたのは、あの地味綺麗な弟殿下様の弟子でした。

「お前、誰だ？」

「とりあえず、姫様の部屋に御神賜様方を転送しても良いですか？」
「え、ええ……」

DQNさんの問には無視し、お弟子さんは妹姫様に了承を得ました。いきなりの展開に戸惑います。

「おいつてめえいきなり現れて何勝手なことやってんだよ！ 王様の命令はどうなるんだ！」

今まで静観していた大柄美少年が怒ります。

「聖騎士が負けた。よって、処刑は無くなったのだろうか？」

「あくまで聖騎士が殺さないという意味だろ、俺らには関係ない」

「おい、なんだよそれ！」

「お前も殿下が誑し込まれて悔しいんだろ？ 何良い子ぶってやがる！」

「俺は殿下の望んでいることを実行するだけだ」

お弟子さんは、さうどこか諦めたように放つ言葉と同時に、わたしを睨みました。どこか恨みがましい目に見えます。そして、怒鳴る大柄美少年を放置し、呪文を唱え、わたしたちを妹姫様の部屋へ転送してくれました。

「鍵穴の形を少々変異させます。これで王様も強硬手段を取らない

限り、入れないでしょう」

「つーかお前誰だよ？」

「彼は弟殿下様のお弟子さんです。ここまでありがとうございまして」

わたしがお弟子さんの他己紹介をし頭を下げると、お弟子さんは顔を歪ませました。

「てめえの為じゃねえぞ糞アマ」

「おい、その口の聞き方はなんだよガキの癖に……ごぼごぼっ！

！！！」

「DQNさん、大丈夫ですか?!」

「ああ、最近風邪引いたんだよ……」

「お礼が遅れましたが、DQNさんも、わたしのためにありがとうございました」

「別にいいって」

「お弟子くん、ありがとう！ お礼にティーとお菓子振舞ってあげる！」

「いいりません。では」

お弟子さんは、姿を消しました。

これからのことは頭に思い浮かばず、ドアを叩く音や王様の強行突破に怯え、わたしたちは眠ったのでした。

DQNはトイレにいた。トイレの水は赤く染まり、咳と共に血は流れる。

「これヤバくねえ？ はは。くそっ、俺どうなっちまうんだろ。もし俺が死ぬとかなったらあいつ……あの状況じゃやっていけねえだろ」

「ドキョンくんどうしたの？」

その声に面を上げると、王弟殿下がいた。

なぜここにいる、という問は無意味だ。彼はいつもDQNの不意について現れる。

「悪いが医者を呼んでくれねえ？ あいつらにはバレないように」

「王様や聖騎士に言えばいいじゃない」

「わかっただろお前、今は敵だ。それに、奴らの情を利用するよ
うなことは気が進まねえ」

「僕にはいいの？」

「お前は敵か味方かわかんねえが、俺のことを好きでもなさそうだな」

「へえ、聖騎士の気持ちは見透かしているんだ。小悪魔だねえ」

「うるせえ」

ふふ、と王弟殿下は晒った。DQNは、この笑顔が相変わらず気に食わないと思った。王弟殿下がイケメンだからではない。本意が読めない笑いだからだ。

「まあ、医者と呼ぶまでもないよ。この世界では、君の病気を治せない。その病原菌はこの世界発祥のものじゃないから」

「お前……医者じゃないのにわかんのかよ？」

DQNが訝しげに王弟殿下を見る。

「だって、君を病気に至らしめたの僕だもの」

「はあ？」

「元々感染し潜伏していた菌の活動を抑えていた免疫を壊し、菌を増幅させ、発症させた。ちょっと菌増やしすぎちゃったのか、思いの外短期間で病が進行したね」

本日の天候の話をするかのように、王弟殿下はのたまった。どこか小馬鹿にしている様だったので、DQNは「悪いけど、成績オール1の俺にもわかるように言ってくんねーかな」と挑発するように言った。

「オール1とはどういう意味？ 君達の世界背景の知識はないから、よくわからないな。」

あ、そうそう。未知なる病原菌がこの世界で感染拡大しないように体内から外へ菌が出た途端、瞬間浄化されるようにしたから安心して咳き込んでいいんだよ？

「何が、『安心して咳き込めばいい』だ！ てめえ何を企んでやがる！」

ドキユンが王弟殿下の胸ぐらを掴んだ。その身長差から子供が大人に反抗しているようで、DQNは余計に苛立ちを募らせる。

「ドキユンくんは乱暴だなあ。考えるよりも目先の感情を率先させるのはいけないな。」

よく考えなよ、君の怒りを向けるべき相手は間違ってるよ。

全ての根源は彼女だ。君ももう気づいているんでしょ？ 君は王妃召喚、つまり彼女に巻き込まれてここへ来てしまった。そして、今は生命の危機となっている」

DQNは王弟殿下を殴った。しかし、体力が限界に近かったDQ

Nの鉄拳はあまりに弱々しく軽かった。DONはその反動のまま倒れ這い蹲り、王弟殿下を睨み上げた。

「そんな怖い顔を向けなくてくれないかな？ 綺麗な顔が台無し。さつきも言ったように、僕じゃなくて彼女を恨みなよ。全ての根源は彼女なんだからさ」

嘲笑を残し、王弟殿下は去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1555x/>

DQNと喪少女がBLファンタジーにトリップした

2011年11月22日02時00分発行